

いの流水俳壇

松尾 満津於選

「当季雑詠」

肩車みんみん蟬に近づきぬ

岡本とも子

〔評〕無論公園などでの若い親子の風景、子供を肩車してみんみん蟬の鳴いている木に近づいているのである。蟬が逃げることを想定して、一定の距離のある空間を置いている。それが「近づきぬ」であり、無駄がなく洗練された句。

秋思ふと老後に及ぶ過疎暮し

竹崎 光子

〔評〕縁先に腰を下ろして漠然と、物思いに耽っている情景である。庭の一樹に秋蟬の声、ふと吾にかえって、自分自身の現在を顧みる、過疎の中に生きて、これからの生活のこと、家族のこと、老後のこと。自然の推移に身をゆだねながら、心の變を見せた句。

狛犬の何か言いたげ秋の影

松岡きよ子

〔評〕狛犬は神社の社頭や、社殿の前など

に置かれる「獅子に似た犬の像」で向い合わせて阿吽の一对となし、威厳を添え魔よけとしている。一对であることから、いつも二人連れで行動する人を指していることもある。何か言いたげな狛犬、何を言いたいのか、言ったらどう受けるか、一对であることが狛犬の条件であるところにこの句の微妙さがある。季節は既に秋の影を深めている。

玉砂利のかるき音して爽やかに

津田 久美

〔評〕九月の句会はいの町の大国さまの幣殿の中で行われた。この句の玉砂利は境内のものであろう、落葉一つなく清掃された情景が記憶にある。情感がひそむ作者の眼は砂上にあり、足下を過ぎる涼風に気持ちをやだねている。玉砂利を歩いている情景だけで他のことには何も触れていないことで「爽やか」さがぐっと引き立っている、俳句は僅か十七文字の世界であるので、何もかも詰め込まず焦点をしぼった方が対照が鮮明に見えてくるものである。

落し文ほぐれて恋の生まれり 片岡 包女
こぼれ萩こぼれ流転の源平餅 友草 水月
なんとなく箸の重たき残暑かな間 浩太

たまさかの大国様や秋の声 榎原喜美子

水跳ねし音一つして神池秋 大川 節弥

福宮の美のりの秋に憩いけり 川上こよね

神木に耳当ててみる今朝の秋 井上 郁子

落し文大国様の密書かも 川村千因子

玉砂利も清し白露の雨に濡れ 森元二美子

野の花と手折り来しかな露草の青 立木ゆう子

大国の樹の苔むして天を突く 楠目 哲郎

稲穂熟れ雀の群れて襲いけり 筒井 眉躬

転ぶ児に少しふとめの夏ぼうし 渡辺万利子

法師蟬の声降り注ぐ 川村 博子

バス停に人影もなし秋の風 筒井 文

秋新た気合い増したる空手の子 中屋 桜子

さりげなく網戸にとまり別れ蟬 弘瀬うき子

盆の月佛迎へり夜半の庭 川村 愛

寡黙なることも答えよ烏瓜 伊藤 たみ

一瞬に闇を深めてはたた神 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」五句
締め切り 毎月15日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

今月の子ども川柳

なつやすみ ラジオたいそう ねむたいな

伊野小2年 川村はるか

夏だよと 知らせてくれる セミの声

伊野小5年 吉良あすか

見てごらん自分で作った心をお

伊野小5年 岡田 未玖

運動会 子より母親 うきうきと

伊野小6年 高野 眸

勉強は 生きるための 通過点

伊野小6年 片岡 りな

11月1日～11月30日は
児童虐待防止推進月間です！

～「あなたの「もしや?」が子どもを救う。～」

